

私の履歴書

釜本 邦茂

つていた。

⑩

若い山口芳忠と私は全7試合にフル出場。チームの18点中6点を私が挙げ、体調不良の宮本輝紀さんの代わりに中盤でプレーしたりもした。

それが学生最後の大会、天皇杯で生きた。当時の天皇杯は65年発足の日本サッカーリーグと大学選手権の各上位4チームに出場資格があり、決

夏になると日本代表は毎年海外に出た。4年生の夏もソ連と西ドイツへ。その途上で見た、1966年のワールドカップ(W杯)イン

ランド大会。ポルトガル代表のエウゼビオの低く重いシュートに目がくぎ付け

になった。

天皇杯優勝で有終の美

関東リーグ、4年連続得点王

大学4年生

日本に戻ると、エウゼビオのフォームを思い浮かべながらなぞるところから始めた。2週間して彼が真横ではなくボールの30センチ向こうに軸足を踏み込んでい

ることに気づいた。それで足とボールの接合時間が長くなり、足のエネルギーがボールに長く伝わるのだと。

間て7試合という殺人的な日程と暑さの中でバンコク・アジア大会の銅メダルを手にした。選手村は風が通る高床式の民家だが、少しも涼しくない。同宿の松本育夫先輩が夜中に床下の隅の物置に潜り込んだ。暑さで頭がやられたかと思ったら、コンクリートの冷たい壁に背中を押しつけ

「これで少しはましよ」。当時の代表はこういう環境で戦

宮のラグビー日本選手権決勝(近鉄対早大)に多く集まっていたのが残念だった。

早大の3得点すべてに絡んだ私は有終の美を飾り、思い残すことのない大学生活になった。新聞記者が選ぶ年間最



天皇杯の表彰式。銀色の天皇杯を持つ森孝慈さん。その後ろで顔が見えるのが筆者＝フォート・キシモト提供

調の波がある長丁場のリーグではどんな時でも結果を確実に出す選手が一番という考え。二人は自分の哲学を述べる度に「なあ釜本」と同意を求める。「形」と「結果」にこだわるどちらの問いにも「はい」「はい」と答えるしかない私を二人の鬼は笑って見ていた。

卒業前、工藤孝一監督の自宅を訪ねた。病で監督を辞していた先生に「この4年間、一度も褒めてくれなかった」とこぼしたら「オマエには将来があるから怒るんだ。そんなことよりサッカーのことを

(日本サッカー協会顧問)